

ラバウル

ジャキツト分遣隊

愛知県 加藤 正夫

中部第二部隊に応召

私は三九・九一度、名古屋氣象台開設以来の猛暑だと言われた昭和十七年七月二十五日に中部第二部隊（歩兵第六連隊）に応召、第三中隊に入隊した。連日の酷暑の中、日中は猛訓練、夜は「ピント」教育三カ月半の後、名古屋市郊外本地ヶ原陸軍演習場での七日間で第一期の検閲を終えることができた。

当時、南方最前線ガダルカナル島で郷土部隊が死闘を繰り返していたので、十一月下旬同年兵の大半が「ガ島」補充要員として出陣して行った。残された四十人は中隊勤務要員として残留を命ぜられ、私は連隊本部功績事務室勤務を拝命し、功績名簿の整理、賞賜物件の交付等多忙の日々を送っていた。

十二月末に昭和十四年現役兵が満期除隊となって故郷に帰った。昭和十八年一月になって陸軍一等兵に進級し精勤賞も授与された。新兵も次から次へと入隊してきて、いつのまにか古兵扱いされるようになっていた。

妻子が日曜日には面会に来てくれたり、時には外出も許されるようになり、ようやく軍隊生活にも馴れてきて一年を迎えようとするころ、中部第二部隊は京都福知山部隊と合併し現役兵部隊になり、補充兵は全員野戦行きだと言う噂が流れ始める。八月になると私たちは勤務を解除され中隊内でブラブラしていた。下旬に入って、北支に中支に南支に「ジャバ」「スマトラ」にと数人ずつ出陣して行った。残された私たち十名にも夏服が支給されたので私は南行きだと直感した。

ラバウルに出陣

九月十六日薄暗い午前五時出陣と決まった。私は幸いにも動員室の市川少佐殿の好意で、老母、妻子四人に見送られることができた。一言も交わすことなく、彼らを見つめつつ車中の人となった。これが最愛の妻

芳子との永遠の別れになるとは神ならぬ身の知るよしもなかつた。

〔妻は昭和二十一年四月二十九日、三十二歳の若さで病死した。私は戦犯部隊として残留を命ぜられ濠軍の使役に毎日かりたてられていた時だった〕

九州佐伯港に到着、敵潜水艦対策の訓練を受け、九月二十二日杉山輸送指揮官の命令で一路パラオ港を目指して出航した。

九月二十八日、パラオ港に到着、瑞穂村に宿営した。約一カ月間パラオ港船舶の使役などに従事し、十月二十九日南洋神社に武運長久と必勝を祈願しパラオ港を出航し、途中二回敵機の襲撃を受けたが、十一月五日早朝ラバウル、ココボ港に上陸した。ここで第三十八師団第二二八連隊第十一中隊に転属となった。直ちに尾張台に野営し連日陣地構築に汗を流していた。

憲兵隊に分遣 ジャキノット分隊長

十二月一日、作業を終わって帰ると人事係伊豆原曹長より明朝六時身辺を整理して完全軍装で出頭せよと

の命令が伝えられた。翌朝第六野戦憲兵隊に分遣を命ぜられた。八時に所定の場所に集合して第四中隊井上義明伍長の指揮で憲兵隊に行くよう指示され、当中隊からは岡田、中島上等兵が勤務しているので指示を受け、当中隊名譽のために頑張ってこいと命ぜられた。憲兵隊に到着すると三十八師団各部隊から兵が集まっていた。

第二二九連隊出身の高田軍曹の指揮で菊地隊長に申告した。総員二十五名であった。隊長から「トトンベラ」方面で蠢動する敵諜（スパイ）を撲滅するため「ジャキノット分隊」を結成する。山本憲兵大尉の指揮の下、目的達成を強く要望する」との訓示を受け、十二月六日夕暮、海軍大発艇で山本分隊長以下二十九名勇躍出航した。制空権は敵の手中にあったので夜間のみ三日間で「ジャキノット」に到着した。ニューブリテン島東南岸一五〇キロの地点で海軍の艇三基地であり、二五ミリ機関砲一基、東少尉以下一二〇名が駐屯していた。

休む間もなく敵諜搜索が連日、今日は東、明日は西

と続いた。私は分隊事務兼山本分隊長の当番兵を命ぜられた。各方面の索敵行動隊から情報が寄せられる。

十二月二十八日、情報を整理して憲兵隊本部に報告に行くよう命ぜられる。十二月三十一日、早朝到着、使命を果たした。昭和十九年の正月は、ラバウル憲兵隊本部で過ごし、一月六日、海軍大発艇に便乗して九日にジャキノットに到着した。

一月十四日、数名の残留兵が小川の近くで設営していた。敵機三機に発見された。ヤシ林すれすれの超低空で爆弾投下する。機銃掃射する、私たちは小川へ飛び込んだ。爆弾は炸裂する、誠に凄まじく熾烈を極めた。私の横にいた万浪上等兵が頭から喉に貫通銃創を受け壮烈な戦死、私の帯剣が真二つに折れていた。危うく名誉の戦死というところだった。山口憲兵軍曹は右肩から大腿部へ打ち貫かれ、痛い痛いとい二日間叫び続け息を引き取った。一月下旬前線から憲兵隊本部へ転進中の前畑憲兵曹長がジャキノット分隊に立ち寄られたので万浪上等兵、山口憲兵軍曹の遺骨の本部持参をお願いした。

忘れもせぬ二月七日、首長を始め三人の原住民が駆け込んで来た。「大型水上機が不時着して敵兵十名が部落に救助を求めて来た」という重大情報だ。山本分隊長は直ちに海軍の協力を依頼して、ポリスボーイ「ベトロス」「ジョニー」を道案内人としてペンペーナー部落に向かった。草原で休んでいる敵兵を発見、ダット少佐以下七名を逮捕した。残念ながら三人は逃走した。

山本分隊長が取調べをし、私は書記をした。私は分隊長の命で彼らに甘味品、缶詰、煙草を与えた。彼らは煙草の「キンシ」と牛缶を絶賛していた。一応の取調べが終わり捕虜たちを海軍の大発艇に乗せて憲兵隊本部に送った。

二月下旬各部隊が前線から転進して来るので分隊長はマラリアで苦しんでいる福田憲兵伍長以下多数を、ラバウルに送還した。

ラバウルに転進

山本分隊長以下十九名は最後まで団結、必勝を誓い

合った。三月十五日ころ、全員陸路転進せよと命令がきた。私たちは峻険な山をよじ登り、ポリスポーイに助けられ大河を渡河し、夜は野宿、敵襲に備え二時間交代の動哨。筆舌に尽くせぬ苦労を重ねての転進。マラリアで倒れた者は、原住民を探し集めてタンカ護送などしてようやく「バイエンミレミ」に到着。ウルグ河を渡河すれば日本軍陣地内、ズンゲン憲兵隊は近い。しかし、体がいうことをきかない。高田軍曹が頑張れと叫ぶ。永井兵長が後から押してくれる、古年兵が「ここでくたばれば野良犬の餌食だ、お前たちの死に場所はラバウルだ」と怒鳴る。

苦しい、故郷の妻子の姿が臉に浮かぶ。胸のポケットから妻子の写真を取り出し、じっと見る、元気が出る。ようやく暮色迫るころ、ズンゲン憲兵隊に到着、温かく迎えられる、ヒゲもそり、垢も流した。

山本分隊長、高橋憲兵曹長、補助憲兵井上伍長以下五名ズンケン勤務を命ぜられ、私たちは翌日、高田軍曹の指揮で行軍を開始した。

インドナ川、カンブ川を原住民の協力で渡河、金鯢

山、双葉山を越えてブツブツ憲兵隊に到着、ここでも温かく迎えられる休息することができた。

ここでも命により中野、加藤信一等兵が残留を命ぜられ別れを惜しみつつ私たちは行軍を続けた。尾張道からトベラ道に入ってゴム林を通過し、トーマ花園道を通過し「ココボ」に到着した。空襲で糧秣もブスブス燃え、威容を誇った一〇三兵站病院も跡形もない。西吹山を横手に眺め函南街道に出て田の浦峠の憲兵隊本部に到着した。ジャキノットを出発以来二十六日目だった。一日休養を与えられ、兵器、被服の手入れをした。

警務課勤務

翌日、私は松田少佐を長とする警務課勤務を命ぜられ、憲兵の取調べの筆記清書、原住民部落の監視、捕虜収容所の衛兵などの業務をこなしていた。戦況は、日々悪化し、七月二十七日憲兵隊に転属となり名実共に憲兵隊の兵隊となった。憲兵隊も前線に出動する。ことになり、ナガナワに憲兵隊本部が前進した。翌日か

ら岩崎憲兵伍長を責任者として、原住民の協力を得て一昼夜三交代で防空壕建設作業が急ピッチで始まった。

一方、自活生活確保のため補助憲兵・山内軍曹を長とする農耕班も結成され、芋、胡瓜、茄子、南瓜、トマト、オクラなど新鮮な野菜が食欲をかりたてた。

防空壕が完成すると私は「養豚、養鶏」の飼育係を命ぜられた。終戦時は豚二〇頭、鶏百羽を数えていた。この豚、鶏は最後まで頑張った米軍捕虜たちのお別れの御馳走になったのである。戦況は敵上陸が時間の問題と言われ、敵戦車への爆雷訓練と、肉弾攻撃切り込み訓練が日夜繰り返されるようになった。食事も米食一日一回となり、芋だけとなった。八月十五日の終戦を迎え我々は最悪の事態を迎えた。

終戦後及び復員

最後まで残った七名の捕虜たちも八月二十二日、我々に見送られて帰っていった。十万の将兵は十カ所に分散させられた。憲兵隊は治安維持のため各集団ごとに配置された。私は第六集団（鏡）に配属させられ

た。抑留二年目の昭和二十一年四月を迎えると復員船が次々と入港し、五月には復員を完了した。憲兵隊は犯罪部隊に指定され残留となった。連日使役にかり出される。光部隊（刑務所）からの呼び出しがあり戦争裁判が始まった。私も二回参考人として出頭した。復員してからも一回呼び出された。勝者が敗者を裁く裁判で、憲兵隊では松本次一憲兵准尉以下六名が死刑を宣せられ殉職した。

菊地隊長以下十六名は、三年、五年、十年、無期の刑を宣せられ、「ラバウル」マヌス島で服役した。

私は昭和二十一年十一月六日、田の浦港出発、十六日浦賀港に上陸、十九日故郷に復員した。

この小稿をまとめるに当たり遠く南冥の地で雄図空しく散華せられた戦友、報復的裁判に悲憤の涙をのんだ六名の戦友に哀悼の誠を捧げ、心からご冥福をお祈りするとともに長年にわたり異郷の地で服役苦勞された戦友に心から御苦勞様とお慰めの言葉を送るものがあります。